

重要文化財  
公開

平成 20 年度 首里城京の内跡出土品展

# 土でつくられた緑の宝石 「小型青磁」

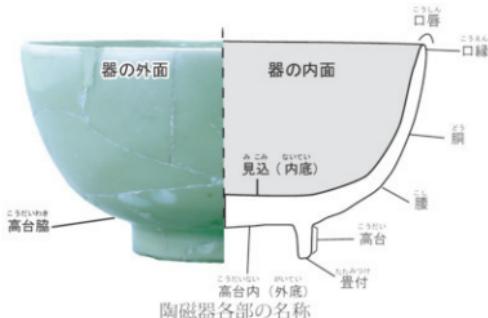


開催期間 平成 21 年 1 月 24 日 (土) ~ 2 月 8 日 (日)

沖縄県立埋蔵文化財センター

## 目 次

ごあいさつ	1
◎ 首里城「京の内」跡とは	2
◎ 重要文化財指定基準	3
◎ 重要文化財指定の名称と指定理由	4
◎ 重要文化財 首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧	5
◎ 青磁とは	6
◎ 首里城京の内跡出土の青磁	7
◎ 「かたち・文様」で見る碗	9
◎ 「かたち・文様」で見る皿	16
◎ その他の「かたち」	20



### 【凡 例】

1. 本書は、「重要文化財公開首里城京の内跡出土品展 土でつくられた緑の宝石『小型青磁』」(開催期間 2009(平成21)年1月24日から2月8日)を補完するものとして編集・作成したものである。
2. 企画等は山本正昭、新垣力が担当した。また、各項目の執筆者は文末に記した。
3. 掲載写真的撮影は矢舟章浩、伊禮若奈が行った。また、本書に掲載されている写真・図面等の無断使用は固く禁ずる。
4. 調査報告書に記載されている資料名と本書に記載されている資料名が一部異なるもののが存在する。これは報告書刊行後、新たな研究成果によって詳細が判明したことによるものである。
5. 本図録において、出土地が明記されていない遺物は首里城京の内跡出土のものである。
6. 本図録の作成にあたって、金沢陽(財団法人 出光美術館)、上里隆史(法政大学沖縄文化研究所)の両氏に指導と助言を賜った。記してお礼申し上げる。

## ごあいさつ

沖縄県立埋蔵文化財センターでは重要文化財「首里城京の内跡出土陶磁器」(518点)を所蔵しています。「首里城京の内跡出土陶磁器」とは14世紀中頃～15世紀中頃に東南アジア各地で生産された世界的にも希少な貿易陶磁器であり、歴史上、意義深く、かつ、学術的に価値の高いものとして平成12年6月27日付けで国の重要文化財（考古資料）に指定されたものです。

これらの陶磁器は平成6年（1994）～平成9年（1997）までの4カ年間実施された国営首里城公園復元整備事業に伴う遺構調査によって発見され、中国との進貢貿易、更に、中国と冊封を結んだ周辺諸国（タイ・ベトナム・朝鮮・日本など）との交易によって琉球王国へ持ち込まれたものであることがわかりました。この貴重な品々は琉球国王即位式などの王家の特別な儀礼や祭祀、あるいは、中国から来流した冊封使の歓待のための宴などに供され、後に王家の祭場となった京の内跡から発見されました。

今回の企画展では、「土でつくられた緑の宝石—小型青磁—」と題し、重要文化財518点のうち「小型青磁」約150点に焦点をあて公開いたします。首里城にもたらされた小型青磁の特徴を「碗」「皿」「杯」「香炉」などのかたちから紹介していきます。

この機会に、中国との冊封体制のもと、東アジア諸国、日本との交易をとおして経済的繁栄を実現し、独自の歴史と文化を形成した琉球王国の榮華をご覧ください。また、重要文化財「首里城京の内跡出土陶磁器」に対するみなさまのご理解が深まれば幸いです。

平成21年1月24日

沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長　名嘉政修

## 首里城「京の内」跡とは

首里城京の内跡は、正殿、南殿、北殿、奉神門などの政事（政治）を行う建物が集中する区画の南西地区に位置し、面積は約 5,000 m<sup>2</sup>と考えられています。

「京の内」の「京」は、“靈力（セジ、シジ）”と同義語であり、その他にも神が降臨もしくは来訪する岩山や小島（南城市諸場御嶽の大岩を“キヨウノハナ”、また、名護市嘉陽集落の東海上にある小島を“きょう”とも称す）等の名称から、首里城「京の内」は、「神が降臨する聖域」と理解されると共に「靈力のある聖域」と解されます。

さらに「京の内」には、絵図や文献などから沖縄の開闢二神降臨の御嶽（拝所）とされる、“首里森御嶽”・“真玉森御嶽”的二つの御嶽以外に、「京の内之三御嶽」と称された三つの御嶽が存在したようです。

重要文化財指定を受けた資料は、沖縄県教育委員会が 1994 年から 1997 年にかけて実施した復元整備事業に伴う発掘調査で、京の内北西地点から、火熱を受けた状態で中国陶磁器をはじめとする多くの陶磁器類が一括して発見されたものです。文献などから、倉庫跡（3m×4m）と考えられています。



# 重要文化財指定基準

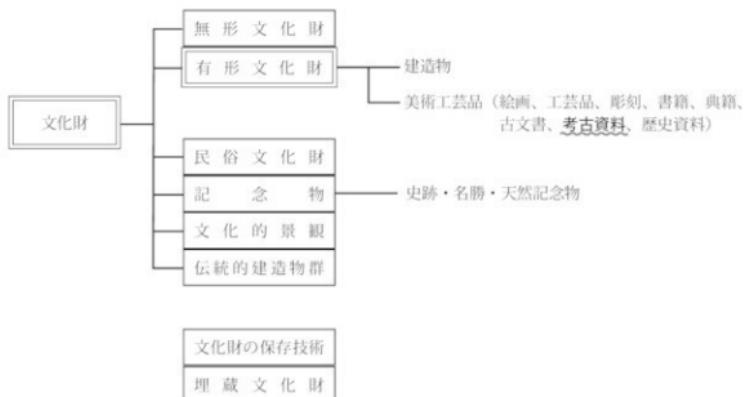
## ◎ 考古資料の部

### 重要文化財

- 一 土器、石器、木器、骨角牙器、玉その他縄文時代及びそれ以前の遺物で学術的価値の特に高いものの
- 二 銅鐸<sup>なぐ</sup>、銅劍<sup>なご</sup>、銅鉢<sup>なご</sup>その他弥生時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 三 古墳の出土品その他古墳時代の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 四 宮殿、官衛<sup>くわい</sup>・寺院跡、墓、経塚等の出土品その他飛鳥・奈良時代以後の遺物で学術的価値の特に高いもの
- 五 渡来品で我が国歴史上意義が深く、かつ、学術的価値の特に高いもの

※○ 国宝及び重要文化財指定基準、(中略)・基準(抄)(昭和26年5月10日文化財保護委員会 告示第2号)  
〔最終改正〕平成8年10月26日文部省告示第185号より一部抜粋。

## ◎ 文化財の種類 (平成17年4月1日施行の文化財保護法の一部改正により、「文化的景観」が新たな文化財として位置付けられた)



・建造物、絵画、工芸品、彫刻、書籍、典籍、古文書、考古資料、歴史資料などの有形の文化的所産で、我が国にとって歴史上、芸術上、学術上価値の高いものを総称して有形文化財と呼んでいます。このうち、建造物以外のものを総称して「美術工芸品」と呼んでいます。

国は有形文化財のうち重要なものを重要文化財に指定し、さらに世界文化の見地から特に価値の高いものを国宝に指定して保護しています。

※ 首里城「京の内跡」出土の陶磁器等は、「国宝及び重要文化財指定基準」の「考古資料の部」で、国の「重要文化財」として指定を受けたことになります。

## 重要文化財指定の名称と指定理由

(考古資料の部)

名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518 点

附 一、金属製品 一括

附 一、ガラス玉 一括

所 有 者：沖縄県（沖縄県立埋蔵文化財センター保管）

（宁保美第3の3号平成12年6月27日付け「重要文化財の指定について」  
文化庁次長より沖縄県教育委員会教育長あて通知より作成）

説 明 文： 尚氏第一王統時代

本件は、沖縄県那覇市首里当蔵に所在する首里城内郭の南西部にあたる、京の内跡の建物跡から出土した陶磁器の一括である。

「京の内」は靈力のある聖域という意味があり、なかに存在した首里森御嶽は琉球王国の最高神女である聞得大君が神を迎えて、歴代の琉球国王に託宣を下した拝所である。

この京の内跡の発掘調査は国営沖縄記念公園首里城地区整備事業の一環として、平成6～7年度に実施され、約2000平方メートルが調査された。その結果、この建物は天順3年(1459)に焼失したことが判明した。

出土した陶磁器は、中国産の青磁、白磁、明代の染付を中心に、元代の染付、色絵、褐釉陶・磁器、瑠璃釉、紅釉など、タイ産の褐釉陶器、ベトナム陶器、日本の備前陶器等で構成されている。これらは概ね14世紀中頃から15世紀中葉のものである。なかでも紅釉水注は、北京の故宮博物院に2点と景徳鎮窯跡出土の破片1点が確認されているのみである。また、元染付の合子は遺存する部分は少ないが、きわめて貴重な出土例である。

また、中国産の陶磁器を中心に、タイ、ベトナム、日本などアジアの主要な陶磁器の生産地から交易によって集められたものが出土している。

琉球王国は首里城正殿前につられていた「万国津梁鐘」の銘文に「船舶を諸国と結ぶ小橋とすることによって異国の宝物類が國中に充満する」（訳文の趣旨）とあるように、中継貿易で栄えた琉球王国の繁榮ぶりを如実に示す貴重な一括資料である。

なおこの建物跡からは、兜鉢、小札、鎖帷子、釘、鍔等の金属製品、火災の際に溶着したガラス小玉塊が出土しており、あわせて保存を図りたい。

（文化庁文化財保護部監修『月刊文化財』平成12年6月号より抜粋）

\* 官報告示：平成12年6月27日付け文部省告示第120号

\* 文化財保護法（昭和25年法律第214号）第27条第1項の規定により、平成12年6月27日付けで重要文化財に指定。

# 重要文化財 首里城京の内跡出土陶磁器指定一覧

## 重要文化財 考古資料の部

指定名称及び員数：沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518 点

附 <small>つけたり</small>	一、金属製品	一括
附 <small>つけたり</small>	一、ガラス玉	一括

### 重要文化財 陶磁器内訳

種類	器種:点数	器種:点数	器種:点数
青磁 (289 点)	碗 103	皿 117	盤 32
	壺 20	大花瓶 2	馬上杯 1
	水注 3	瓶 5	香炉 3
	水滴 1	花盆台 1	大鉢 1
白磁 (33 点)	碗 14	皿 11	杯 2
	水注 1	壺 1	瓶 4
元染付 (2 点)	馬上杯 1	大合子 1	
明染付 (58 点)	碗 32	皿 4	杯 3
	鉢 1	瓶 14	壺 4
いろ絵 (3 点)	碗 2	皿 1	
こう油 (1 点)	水注 1		
瑠璃釉 (2 点)	碗 1	瓶 1	
かつゆ (1 点)	碗 1		
褐釉陶器 (35 点)	壺 30	水注 1	鉢 1
	壺蓋 1	特殊壺 1	
	蓋 1		
白釉陶器 (3 点)	壺 2	水注 1	
タイ産褐釉陶器 (55 点)	壺 55		
タイ産半練土器 (22 点)	蓋 18	壺 4	
ベトナム陶器 (3 点)	瓶 1	水注 2	
備前ほか (本土産) (6 点)	手りぼち鉢 1	かめ 3	壺 2
瓦質土器 (沖縄産) (5 点)	蓋 5		
合計		518 点	

# 青磁とは

青磁とは、通常素地や釉薬が緑ないし青色系の色調となる磁器を総称しますが、同じ成分の素地や釉薬で黄色または黄褐色に焼成されたものも含めことがあるなど、その定義には様々な見解がみられます。陶磁器の中では極めて長い歴史を持っており、古くから中国をはじめ朝鮮・日本・ベトナム・タイ・ミャンマーなどで生産されています。

青磁の持つ独特の色は、釉中に含まれた微量（1～2%）の酸化第二鉄が還元されて酸化第一鉄となって発色するもので、酸化第二鉄の量が1%未満なら透明に近い色となり、10%を超えると黒に近い色になります。

中国では、千度以上で焼成された施釉陶磁器を瓷器（磁器）と総称します。本灰や石灰を原料とした釉薬は高火度で溶けてガラス質の皮膜となり、堅く焼きしまった灰釉陶器が完成します。中国ではこれを「原始磁器」または「原始青磁」と呼び、青磁の先駆的なやきものとして位置付けています。

原始青磁が誕生したのは商（殷）代中期（紀元前16世紀頃）で、当時は国外への輸出品ではなく、明器（墓に副葬品として納められる祭祀用の器）を主体に生産していました。その後、西周後期から春秋・戦国時代に長江下流域で技術が発達し、大型製品や青銅器を忠実に模倣した製品などが生産されました。戦国時代後期から漢代は一時生産が停滞しますが、唐代には浙江省越州窯で青磁生産が本格化するようになります。

越州窯の青磁は国外へ本格的に輸出された最初の製品で、その流通範囲はアジア全域に及び、遠くはエジプトにまで到達しています。この青磁は日本にも輸入されており、『源氏物語』にもその名をみることができます。

宋代になると青磁生産は更に盛になります。特に南宋代では浙江省龍泉窯と福建省同安窯が一大生産地として、輸出用の青磁を焼造するようになります。日本にも膨大な量の青磁がもたらされ、沖縄に初めて青磁が登場するのもこの時期です。ただし、中国から直接青磁を輸入していたのではなく、日本を経由して運ばれたとされています。

沖縄が中国との直接交易を開始したのは元代と思われますが、明代になると中国との朝貢関係に基づく進貢貿易によって、大量の青磁が輸入されるようになります。沖縄はこれらの青磁を東南アジア各国との中継貿易に使用することで、『万国津梁錦』の銘文にみられるような繁栄を遂げたと考えられます。

以上のことから、青磁は中国を代表するやきものであるとともに、グスク時代の沖縄を語る上で欠かせないやきものであるといつても過言ではないと思われます。

(新垣力)

## 首里城京の内跡出土の青磁

1945（昭和 20）年の沖縄戦と戦後の琉球大学設置による造成工事で首里城は大部分が失われてしまいました。その後の首里城公園整備により京の内跡の復元が進められ 2003（平成 15）年から一般公開され、内部を見学することができるようになりました。かつては鬱蒼とした森の中に 4 または 5 箇所の御獄があったと考えられ、その姿が現在、史跡整備によって甦りつつあります。しかし、この姿は約 400 年前のもので、それより以前については発掘調査により大量の陶磁器が出土したことから御獄とは異なる別の姿が存在し、それが調査、研究を通して浮かび上がろうとしています。今回公開する青磁はかつて別の姿をしていた京の内を知る上で欠かすことのできない歴史の証言者であると言えるでしょう。

この首里城京の内跡から出土した青磁は現在、報告されているもので総計 610 点を数え、大型のものでは壺や瓶、鉢、器台などが確認されています。小型のものは、碗 202 点、皿 268 点、高台付杯 2 点、花盆台 2 点、香炉 1 点が確認されています。その中でも碗と皿は青磁全体から見ると 8 割近くを占めていることから、首里城京の内跡における青磁の主要な器種であったと言えます。これらの大半は 14、15 世紀において青磁の一大生産地であった中国福建省の龍泉窯<sup>りゅうせんとう</sup>及びにその周辺で焼造されたものです。龍泉窯はやや内陸に位置しているため、河川を使った水路で沿岸部まで運ばれ、14、15 世紀に琉球の人々が頻繁に訪れていた福州や泉州をはじめとする福建省の沿岸都市から、これらの青磁が大量に荷出しされたと考えられます。また量は少ないですが福建省泉州窯や韓半島、ベトナムで焼造された青磁も出土しています。



検出直後のようす

大型製品については、直接中国明の皇帝から下賜（※1）された品々が多く含まれていますが、碗、皿をはじめとする小型製品はそのほとんどが民間の窯で焼造されたものです。そのため、碗や皿の底部に製作の際に付いた傷や粘土、砂粒がそのまま残っており、不良品と思われるものが数多くみられます。このように質の良し悪しが認められる青磁は14世紀中頃から15世紀中頃にかけて生産され、首里城にもたらされたもので、その量と種類から当時において環シナ海をまたにかけて活動していた琉球王国とその周囲で関わっていた人々の姿を彷彿とさせます。

首里城京の内跡から出土した遺物は15世紀中頃の火災によって埋められた陶磁器の一括資料でもあり、石積みで囲われたくぼみ（3m×4m）から大量に出土しました。火災により火熱を受けた痕跡は表面の光沢が失われて器の表面に微小な孔が多く観察できる他、高熱により赤色やピンク色に変色しているもの、煤の付着が見られるものなどがあります。

また文献記録では15世紀中頃に首里城が2度の火災に遭っていることが記されています。1つは1453年に王位をめぐって争った尚志魯・布里の乱（※2）に伴う火災ともう1つは1459年に首里城内からの失火によるものがあります。現在のところ、1459年の火災で使えなくなった陶磁器がまとめて埋められた遺物として報告されています。当時は木造の建物が主体であったことから、火災による被害が相当あったものと想像され、これらは当時の火災の痕跡を生きしく今に伝えています。高熱を受けている青磁はすべて破片であり、本来の色や形が失われてしまっていますが、首里城の中で道具としてその命脈を終えた資料として見ることができます。

（山本正昭）

※1 身分や位の高い人から分け与えられること。

※2 叔父、甥の関係であった尚志魯と尚布里との間でおこった王位継承をめぐっての内乱。こ

の内乱の結果、尚志魯と尚布里共に倒れ、初代王である尚巴志の第5子である尚泰久が第5代目の王位に就いた。



首里城京の内跡出土陶磁器（重要文化財）

# 1. 「かたち・文様」で観る碗

**琉**球列島の遺跡から出土する青磁の中で最も多い器種は碗です。碗は食物を盛るための日用雑器として、そして権威付けるための物として、また『歴代宝案』(洪熙元年～成化6年)で「青碗二千箇」をマラッカへ中継貿易した、とあるように、貿易品としても用いられていました。首里城跡の内跡からも、多くの青磁碗が出土しており、それらは14世紀末から15世紀中頃までの間で種類がまとっています。ここでは首里城跡の内跡出土の青磁碗が首里城跡の中でどのようない位置づけになるのか、首里城跡にもたらされた青磁碗の流行を追いかけながら見ていきたいと思います。

**最**初に琉球列島へ運ばれた青磁碗は鎧蓮弁が外面に描かれる碗です。弁をそれぞれ立体的に浮き立たすような表現で、丁寧なつくりとなっています。また澄んだ青緑色の釉調のものも見られ、これらは枯青磁と呼ばれることもあります。首里城跡では東のアザナ地区などから出土しています(写真1 以下、鎧蓮弁文碗)。形から見ると高台は小さく、脣付は狭く、胴部の膨らみはあまり有さず、口縁部は直口するといった特徴が見られます。この鎧蓮弁文碗は13世紀前半頃に福建省龍泉窯で焼造され(上田2006)、以降、東アジア各地域へ輸出されました。他にこの時期の青磁碗には片切り彫りの劃花文を描く、直口口縁の碗(写真2)がありますが首里城跡からは現在のところ僅かしか出土していません。

**14**世紀に入ると様々な種類の青磁碗が琉球列島各地に入ってくるようになります。首里城跡でも例外なく出土しています。形の変化から見ていくとまず、口縁部が直口と外反と2種類のものが見られるようになります。また胴部は膨らみを有するようになります。底部は径が大きくなり、脣付が平たく、広くなります。また外底には釉薬が施されないといった特徴が見られます(写真3)。文様では鎧蓮弁と鎧を有さない無鎧蓮弁(写真4)が見られます。鎧を有する蓮弁は13世紀の時期のものに比べて、鎧の稜線が不明瞭となる



写真1 鎧蓮弁文碗  
首里城跡東のアザナ地区出土



写真2 划花文碗  
首里城跡下の御庭地区出土



写真3 碗底部  
首里城跡御内原西地区出土



写真4 無鎧蓮弁文碗 天界寺跡出土

か（写真5.6）、蓮弁の幅が小さくなっている傾向にあります（写真7.8）。その他に、口縁直下に数条の横位線を描く弧文帯（写真9）、ヘラ書きの草花文（写真10）があります。なお、弧文帯は後述する雷文帯の前身と考えられています（上田 1982）。



写真5 鎮蓮弁文碗 首里城跡 歓会門・久慶門地区出土



写真6 鎮蓮弁文碗 首里城跡 城の下地区出土



写真7 鎮蓮弁文碗 首里城跡 御内原地区出土



写真8 鎮蓮弁文碗 首里城跡 二階殿地区出土



写真9 弧文帯碗



写真10 草花文碗 天界寺跡出土

記までは首里城京の内跡出土時期以前の青磁碗について触れてきましたが、14世紀後半になると中山国王の察度が中国・明へ朝貢し冊封を受けることによって更に膨大な数と種類の青磁碗が首里城に運び込まれ、消費されていくようになります。首里城京の内跡から出土する青磁碗はまさにこの頃に中国・明からもたらされた文物です。この時期の青磁碗は、口縁部が直口と外反の2種類が見られるのは前代と変わりませんが、器高がやや高くなります。また、高台が外側に「ハ」の字状に開くものも見られるようになります。高台内の釉薬の施し方からも特徴を示すことができます。釉薬を全て掻き取るタイプ（写真11）、ドーナツ状に中央部分を残して掻き取る蛇の目釉刺ぎのタイプ（写真12）の2つのパターンを見ることが出来ます。



写真11 底部釉刺ぎ



写真12 蛇の目釉刺ぎ

この時期の青磁碗は、形と施釉だけでなく、多様の文様を見るすることができます。まず、雷文帶は、手書きの雷文（写真13）と型押しの雷文（写真14）との2種類あり、前者は雷文の下部にラマ式蓮弁文（写真15）が後者は内面に型押しの人物像が施されています。さらに形との関係について、前者は高台が厚く、疊付も広いのに比べ、後者は高台がやや薄く、ハの字状となります。両者共に口縁は直口し、胴部は底部近くでは膨らみを有しますが、口縁部近くになると直に立ち上ります。次に、この時期においても無錫蓮弁文が見られますすが、幅広の蓮弁文（写真16）や幅の狭い劍先蓮弁文（写真17）、そして蓮弁が雖に描かれ、弁先が閉じていない蓮弁文（写真18）といったような様々な文様が見られるようになります。これらは内底面に印花文や、内面にヘラ描きの草花文が描かれる場合が多く（写真19）、ラマ式蓮弁を全体に描くものもあります（写真20）。その描き方はかなり雑で、省略化も進んでおり、口縁部は直口と外反の両方見るこ



写真13 雷文帶碗 (手書きの雷文)



写真14 雷文帶碗 (スタンプ雷文)



写真15 雷文帶碗 (ラマ式蓮弁文)



写真16 幅広の無錫蓮弁碗



写真17 幅の狭い無錫蓮弁碗



写真18 弁先が省略化した無錫蓮弁碗



写真19 無錫蓮弁文碗 (ヘラ描き草花文)



写真20 ラマ式蓮弁文碗

とが出来ます。また、口縁部、胴部に文様を施さない無文のものがあります。内底面は印花文が見られ、口縁部は直口と外反と両方見ることが出来ます（写真21,22）。無文直口タイプはこの時期において新たに見られる形で、無文外反タイプは前代から続く形です。



写真21 無文外反碗



写真22 無文直口碗

**首** 里城京の内跡ではあまり出土しない青磁碗についてもここで少し触れておきます。佐敷タイプと呼ばれる（金武 1990）口縁部が厚くなる玉縁状口縁を有する碗です（写真23）。南城市にある佐敷グスクからまとまって出土したことから、この名前で呼ばれています。特徴としては口縁部と胴部は無文ですが内底面にのみ釉剥ぎされた中に型押し文様を描いています。また胴部は大きく膨らみを有し、底部は豊付が平たく、やや厚くなります。また釉薬は外底には施されないといった特徴もあげられます。形と施釉から見ると前代からの系譜を引く青磁碗であると言えます。



写真23 玉縁口縁碗 天界寺跡出土

**15** 世紀後半の青磁碗は京の内の陶磁器が火災に遭って埋められて以降にもたらされたものになります。首里城跡の他の地区からは多く出土しているので、ここで紹介します。まず形から見ると口縁部が直口にほぼ限定され、口径も小さくなります。全体的に器高は高く、胴部は底部近くが膨らみを有していますが、口縁部にかけては直に立ち上がるといった特徴が見られます（写真24）。また底部は径が小さく、底面の壁が厚くなり、高台下部は内外面共に面取りがなされています。また釉薬は外底面が蛇の目釉剥ぎで、前代からつくりが引き継がれているのに対して、高台途中から外底面にかけて施釉されないものが新たに見られるようになります（写真25）。かなり難に施釉されているものや、釉薬の質が悪く、器壁に小孔が多く見られるなど、



写真24 無文直口碗 天界寺跡出土



写真25 碗底部 首里城跡 書院・鏡之間地区出土

粗製のものも多く見られるようになります。文様は型押しの雷文帯、線刻細蓮弁文、印花文（写真 26）を見ることができます。線刻細蓮弁文は蓮弁が一枚一枚単位として描かれているもの（写真 27）と、形が崩れ蓮弁が単位として描かれていないもの（写真 28）があり、前者は 15 世紀後半、後者は 16 世紀と考えられています（上田 1982）。また、数は少ないですが、雷文帯が省略化して波頭文帯となる文様があり、口縁部の径と底径が大きく、器高が低くなる直口碗（写真 29）も 15 世紀末から 16 世紀にかけて見られます。釉薬は高台外面途中まで施され、緑色よりも水色に近い淡い釉調となります。これらの他に高台が低く、疊付が広い無文の直口碗が首里城跡城郭南側下から出土しており、現在のところこの碗は福建・廣東地域の一帯で焼造されたものと考えられています。

この時期の青磁碗はかなりつくりが粗く、文様も省略化された製品が多く見受けられるようになります。その理由として、15 世紀後半以降、中国国内では景德鎮において青花の焼造が盛んとなっており、すでに青磁は流行の外へ追いやられている状況があげられます。琉球列島でもこの時期は青磁に代わって青花が大量に入って来るようになっていました。16 世紀後半になると青磁碗から青花碗へと完全に流行が移り、青磁碗は歴史の舞台から消えることになりました。



写真 26 印花文碗  
首里城跡 右掖門地区出土



写真 27 線刻細蓮弁文碗 首里城跡書院・鎖之間地区出土



写真 28 線刻細蓮弁文碗 天界寺跡出土

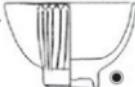
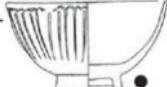
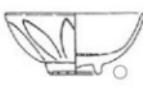


写真 29 波頭文帯碗 首里城跡 下之御庭・木曳門地区出土

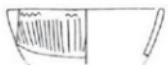
**以** 上のように、青磁碗は琉球列島の国家形成の前後を挟んで広く流通した器の形で、首里城はもとより琉球の歴史を紐解いて行く上で欠かすことが出来ない考古資料と言えるでしょう。その中でも京の内跡から出土した青磁碗は 14 世紀中～15 世紀中頃に琉球が東アジアに躍進したことであらわす一級の資料と位置づけることができます。

（山本正昭）

青磁碗編年表（上田 1982 を改変）

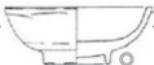
16世紀		
		
		 線刻細蓮弁文碗 写真 27 と同タイプ
15世紀		 劍先蓮弁文碗 写真 17 と同タイプ
		 無鏹蓮弁文碗 写真 16 と同タイプ
		 無鏹蓮弁文碗 写真 18 と同タイプ
		 雷文茱碗 写真 13 と同タイプ
14世紀		 無鏹蓮弁文碗 写真 4 と同タイプ
		 無鏹蓮弁文碗 写真 5, 6 と同タイプ
13世紀		 鑷蓮弁文碗 写真 1 と同タイプ

16世紀



縞刻細蓮弁文碗

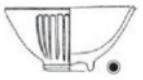
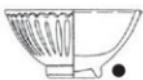
写真 28 と同タイプ



波頭文帶碗

写真 29 と同タイプ

15世紀



雷文帶碗

写真 15 と同タイプ



無文外反碗

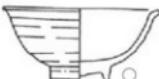
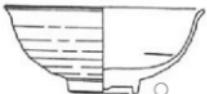
写真 21 と同タイプ



無文直口碗

写真 22 と同タイプ

14世紀



弧文帶碗

写真 9 と同タイプ



鎧蓮弁文碗

写真 7, 8 と同タイプ

13世紀

0 10 20cm

- 高台外面まで釉がかかり、置付を含めて外底無釉のもの
- 高台内面途中まで、釉のかかるもの
- 全面に施釉後、外底の釉を輪状に削り取るもの
- 高台外面の途中まで釉のかかるもの

## 2. 「かたち・文様」で観る皿

**美**術的な視点では、碗は胴部の外面、皿は胴部の内面（見込とも呼ばれます）が「顔」になるといわれています。つまり、皿の「かたち」を理解するには、碗のように胴部外面を正面に据える以外に、俯瞰した姿が重要になるのです。この特徴を念頭に置いて皿を観察すると、碗とは違った「かたち」の変遷を読み取ることができます。

**青**磁をはじめとした陶磁器の多くに共通することですが、中世相当期（12～16世紀頃）に生産されていた皿は、我々が現在想像するものよりも小さいサイズが主体を占めます。規格としては口径10～15cm程度、高さ5cm未満が多く、現在の製品に例えるならば料理を取り分ける小皿に相当します。この種の皿が多数生産され、琉球列島を含むアジア各地に流通していたという点から、当時の食生活で皿がどのような役割を担っていたのかを想像するのも興味深いと思われます。

**沖**縄に初めて青磁皿が登場するのは12世紀後半頃です。この時期の青磁は福建省同安窯や浙江省龍泉窯で生産されたもので、「かたち」の特徴としては底部に高台を持たない平底です。これらの皿は13世紀前半頃まで使用されますが、現在のところ首里城跡からの出土例は確認されていません。そのため、首里城の創建年代は古くとも13世紀後半頃と考えられます。

**次**に登場するものは口縁部を外側に折り曲げた皿で、その形態から口折皿または鉤縁皿と呼ばれています。外面胴部に立体的な鎧蓮弁を描き、内底には双魚を貼り付けるものが代表的な資料です（写真1）。中でも、13世紀後半～14世紀前半頃の製品は器壁が薄く、施釉や文様装飾が丁寧であり、遺跡からの出土量も少ないことから、同時代の製品と比べて高級品であったと思われます。この皿は京内の出土品にも1点確認されていますが、他の資料より年代が古いため、アンティークとして持ち込まれた可能性が考えられます。生産地は龍泉窯で、施釉や文様装飾などの精緻なつくりから、いわゆる古青磁の系譜を引くものとされています。

**14**世紀後半には、中山王察度が中国・明朝との間に朝貢関係を結んだことにより、青磁をはじめとする膨大な量の陶磁器がもたらされます。口折皿は14世紀後半以降も引き続き出土しますが、前代の製品に比べて器壁が厚く、文様が多彩になるとともに簡略化が進みます（写真2）。この口折皿の「かたち」が変化し



写真1 口折皿



写真2 口折皿

たと考えられるものが外反皿（写真3）で、器形の細かな違いにより多くのバリエーションがみられます。写真4は腰部に横位の稜線が入るもので、腰折皿とも呼ばれます。文様は両面胴部に蓮華唐草文をめぐらせます。写真5は八角皿と呼ばれるもので、腰折皿の胴部に縦位の稜線が入り、上から見た姿は八角形になります。文様は内面胴部を8面に区画した後、その中に雷文と飛雲文を描いています。写真6は稜花皿と呼ばれるもので、腰折皿の口唇部に数ヶ所抉りを入れて、俯瞰した姿が花弁状になるように成形しています。文様は両面胴部に花唐草文をめぐらせます。これら外反皿のグループには、内底に蓮華や牡丹のスタンプ文を施す、釉薬は全面施釉後に高台外面を蛇の目状に搔き取るなどの共通した特徴がみられます。

**他** に外反皿が変化したものとして、腰部が丸みを帯びて口縁部が直口し、端部を玉縁状に肥厚させるものがあります（写真7）。また、直口口縁の皿には写真8のような小型品もみられ、外面胴部にヘラ描きの細蓮弁を施します。内底の印花文や施釉方法については、外反皿のグループと同様の特徴を有します。



写真3 外反皿



写真4 腰折皿



写真5 八角皿



写真6 口折皿

これらの製品はいずれも龍泉窯及びその周辺地域を産地に持ち、年代は14世紀後半～15世紀代に位置付けられ、全て京の内跡から出土しています。



写真7 直口皿



写真8 直口皿



ところで、この時期の青磁皿の特徴の一つに、模倣品の登場と挙げることができます。前述した口折皿をはじめとする製品のほとんどにコピー製品がみられます（写真9、写真10、写真11、写真12）が、その全てに共通しているのが、①文様が簡略化され粗雑である、②施釉が雑で両底面または外底面が露胎である、③素地が陶器質で磁化していない、などの特徴です。これらの製品は福建省の沿海部、朝貢貿易の際に琉球船が寄港する福州及びその周辺地域で生産されたと考えられており、京の内出土品にも一定量含まれています。ちなみに、八角皿には現在のところ模倣品がみられません。

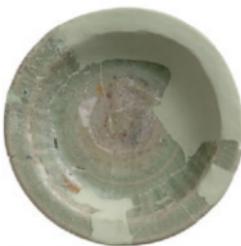


写真9 口折皿



写真10 外反皿



写真11 直口皿



写真12 直口皿

# 16

世紀になると遺跡から青磁が出土する量が減少し、京の内出土品にもみられなくなります。これは琉球國の中継貿易が衰退していったことが主な原因ですが、明朝国内の陶磁器生産事情も関係しています。14世紀後半頃に誕生した青花（日本では染付とも呼ばれます）が15世紀以降生産量を増大させ、海外に輸出される陶磁器の主体を占めるようになります。この時期に登場するものは口唇部に刻みを入れた直口皿で、両面胴部を花弁状に装飾及び成形するため、俯瞰した姿から菊花皿とも呼ばれます（写真13）。この皿は前代の小型直口皿（写真8）に器形や文様が類似することから、小型直口皿の系譜を引くものと考えられます。またこの時期には、青花の生産地である江西省景德鎮窯で生産された青磁が少量出土します（写真14）。「かたち」は龍泉窯産の小型直口皿に似ますが、器壁が薄く成形が丁寧で、高台内面が白磁になるという特徴を持っています。この製品は首里城跡及びその関連遺跡に出土が限られているため、出土状況に何らかの意味が想定されます。そしてこの皿の存在は、当該期においても琉球が青磁皿を求めていたことを表しているともいえます。



写真13 菊花皿 首里城跡 右掖門地区出土



写真14 菊花皿 天界寺跡出土

以上、沖縄から出土する青磁皿を概観してきましたが、「かたち」でみると底部形態は高台を持たない平底皿から高台を有する皿へ、口縁形態は口折皿から外反皿を経て直口皿への変遷を読み取ることができます。また、「かたち」の変化と製品の年代、生産地の移動はリンクしていることから、青磁皿の「かたち」の変化が歴史を雄弁に物語っているといえるでしょう。

（新垣 力）

### 3. その他の「かたち」

**首** 里城京の内跡及びそれ以外の地区から、ユニークな形の青磁がたくさん出土しています。ここではそれらを個々に紹介していくことにします。



杯 首里城跡 御内原地区出土

高台を持たない直口口縁の杯です。底部の形態は碁石を入れる容器に類似することから、碁筒底と呼ばれます。



香炉 天界寺跡出土

筒状に立ち上がる小型の三足香炉です。用途としては、茶道具の一種（聞香に使用した香炉）であつたと考えられます。



水滴 首里城跡 用物座地区出土

胴部が八角形に面取りされたもので、各面に細かな文様を描きます。火熱により表面は疵痕状になっています。



水滴 首里城跡 用物座地区出土

魚を象った水滴で、左右別々に成形したものを持り合わせ、口の部分から水が出るようにつくられています。硯に伴う文具として使用されたと考えられます。



首里城跡 下之御庭地区出土



首里城跡 用物座地区出土

すりばち  
擂鉢

内面に擂目が放射状に刻まれ、両面とも胴部から下は露胎です。茶道具の一種（懐石料理の調理具）として使用された可能性があります。



瓶

小型瓶の底部資料で、釉薬の大半は火熱により変色しています。器形はいわゆる玉壺春瓶に近い形態になると考えられます。



壺

輪廻成形された小型の壺で、首と肩のところに継ぎ目がみられます。用途については判然としません。



器台

上部の乗せ台には蓮弁が施され、脚部には雷文を見ることができます。またその下には五葉文の透かしを見ることができます。



器台

三足の器台でラマ式蓮弁状の透かしが見られます。小型であることから碗や皿を置いたと考えられます。外面は火災により大きく変色しています。



有文高足杯

脇部に蓮弁文が描かれた高足杯で、脚部には竹の節を象った圓線が一条めぐっています。脚はほぼ直線上に立ち上がり、底部近くは少し開き気味になっています。



無文高足杯

無文の高足杯で口縁部は外反し、脚部は下部に向かって末広がりに開いています。



有文高足杯 首里城跡 二階殿地区出土

内底面にかなり省略化された印花文が施される  
脚部には節状に3条の圈線を見ることができます。



蓋の摘み（巻貝）首里城跡 管理用道路地区出土

法螺貝を象った青磁の一部です。殻頂部のみで下端  
は欠損しており、全体形状は不明です。



型物（螺貝）首里城跡 管理用道路地区出土

螺貝を象った形象物です。外面に螺肋様の文様  
を見ることができます。



型物（螺貝） 首里城跡 黄金御殿地区出土  
螺貝を象った形象物です。外面にはかなり細かく表現された螺肋様の文様を見ることができます。



燭台 首里城跡 城郭南側下地区出土  
高台の低い腰折れの皿ですが、内底に筒状の灯心受けが付いています。



型物（唐子人形）  
首里城跡 下之御庭首里森御嶽地区出土  
型取りされた人形の足と台座の部分です。唐子(中國の子供)を象っており衣装はズボンであることが見てとれます。



駒 首里城跡 右掖門及び周辺地区出土  
直径 4.1 cmの中国将棋の駒で、表面に「包」若しくは「炮」が刻まれています。将棋駒は一般的に木製で、この資料は青磁製であることから高級品であると思われます。

## 【参考文献】

- 新垣力「沖縄における茶の湯の普及とその影響－14世紀～17世紀頃の考古資料からの検討－」『南島考古』第26号 沖縄考古学会 2007
- 新垣力・瀬戸哲也「沖縄における14世紀～15世紀の中国産白磁の再整理 付14～15世紀の青磁の様相」『沖縄埋文研究』5 沖縄県立埋蔵文化財センター 2005
- 石垣市総務部市史編集課編「陶磁器から見た交流史」『石垣市史ビジュアル版』5 石垣市 2008
- 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982
- 上田秀夫「龍泉東区BY24出土青磁碗と日本出土の龍泉窯系青磁碗」『前近代の東アジア海域における唐物の交易とその意義』国立歴史民俗博物館 2006
- 上原静「考古学からみた沖縄諸島の遊戯史」『グスク文化を考える』新人物往来社 2004
- 岡本弘道「明朝における朝貢国琉球の位置付けとその変化」『東洋史研究』第57巻 東洋史研究会 1999
- 沖縄県教育庁文化課（編）『沖縄県文化財調査報告書第132集 首里城跡一京の内跡発掘調査報告書（I）－』沖縄県教育委員会 1998
- 金沢陽「倉木崎“沈船”考」『宇検村文化財調査報告書』第2集 宇検村教育委員会 1999
- 亀井明徳（編）『専修大学アジア考古学研究報告書1 明代前半期陶磁器の研究－首里城京内のSK01出土品－』専修大学文学部 2002
- 金武正紀「沖縄の中国陶磁器」『考古学ジャーナル』No.320 ニューサイエンス社 1990
- 久手堅憲夫「首里の地名－その由来と縁起－」第一書房 2000
- 下中弘（編）『やきもの事典』平凡社 1984
- 瀬戸哲也ほか「沖縄における貿易陶磁研究-14～16世紀を中心にして-」『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』補遺編 全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～」実行委員会 2007
- 田中克子「博多遺跡群出土の内底露胎の磁器の一群について」『博多研究会誌』第4号 博多研究会 1996
- 出川哲朗・中ノ堂一信・弓場紀知（編）『アジア陶芸史』昭和堂 2001
- 長谷部栄留（監）【カラー版】『世界やきもの史』美術出版社 1999
- 長谷部栄留・今井牧（編著）『中国の陶磁 第12巻 日本出土の中国陶磁』平凡社 1995
- 水澤幸一「貿易陶磁の国際情勢へ青磁を中心にして～」『貿易陶磁研究』第20号 日本貿易陶磁研究会 2000
- 水澤幸一「15世紀前葉から中葉の貿易陶磁様相」『貿易陶磁研究』第24号 日本貿易陶磁研究会 2004
- 森達也「宋・元代竜泉窯青磁の編年的研究」『東洋陶磁』第29号 東洋陶磁学会 2000

---

## 重要文化財公開 首里城京の内跡出土品展

## 土でつくられた緑の宝石「小型青磁」

発行年月日 平成21年(2009)1月24日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

URL <http://www.maizou-okinawa.gr.jp>

---

## ご案内

### 第32回文化講座

【日時】 平成21年1月24日(土)午後1時30分～4時

【場所】 沖縄県立埋蔵文化財センター 研修室

「京の内出土陶磁器の評価について」

講師：大橋康二（前佐賀県立九州陶磁文化館館長）

「京の内倉庫跡出土の金属製品について」

講師：金城亜信（県立埋蔵文化財センター調査班）

### ギャラリートーク（展示説明）

1月31日(土) 午後2時 当センター主任 山本正昭

2月1日(日) 午後2時 当センター専門員 新垣力

開所時間：午前9時～午後5時まで（入所は午後4時30分まで）

休 所：毎週月曜日、国民の祝日（子供の日、文化の日を除く）、

年末年始（12月28日～1月4日）、慰靈の日（6月23日）

振祝日と月曜日が重なったときは、翌日の火曜日も休所。その他、臨時休所あり

交 通：◇沖縄自動車道西原ICより車で7分

◇市外線バスターーミナル発那覇バス97番 「琉大附属病院前」下車徒歩1分

入 場： 無 料

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

沖縄県立埋蔵文化財センター

TEL 098-835-8751 FAX 098-835-8754

URL <http://www.maizou-okinawa.gr.jp>